バサグラン剤　上市50周年に寄せて

公益財団法人日本植物調節剤研究協会
常務理事　村岡哲郎

このたびはバサグラン剤（有効成分はベンタゾン）の上市50周年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

本剤が長い間、多くの農家の方々に愛され続けているのは、剤の開発を決定されたBASF社経営陣の優れた先見の明と、研究、開発、普及に携わられてきた関係者の皆様のたゆまぬ努力によるものだと改めて実感し、深く敬意を表します。

私が初めて本剤のお世話になったのは、昭和50年代後半、新人研究員として水稲の生育調節剤（植物成長調整剤）の試験を担当していた時のことでした。生育調節剤の試験では作物の生育量や収量のデータが重要なので、雑草はしっかりと防除する必要がありますが、あいにくその年に使った圃場はクログワイが多発する田んぼでした。田植え後、当時普及し始めていた一発処理剤を散布しましたが、残念ながらクログワイにはほとんど効果がありませんでした。そのため夏の暑い盛りに田んぼに入り、延々とクログワイを抜き続ける羽目になったのですが、それを見ていた上司から教えられたのがバサグラン液剤でした。早速、田んぼの水を落として茎葉散布してみると、数日後、稲の間に無数に生えていたクログワイが一斉にオレンジ色に変色し、夏の日差しの下、見事に枯れていくではありませんか！あの時の光景は今でも心に残っています。

おそらく初めてバサグラン剤を使われた農家の方々もきっと同じ感動を覚えたことでしょう。そして、このような画期的な剤を開発・上市されたBASF社さんをはじめとする農薬メーカーの方々に感謝の念を抱いた方も多いと思います。

ただ、このバサグラン剤、開発開始から上市に至るまでには色々とご苦労もあったようです。弊協会の記念誌「植調二十年史」によりますと、昭和40年代前半に初期剤と中期剤の体系処理によって、水田における一年生雑草の防除法がほぼ確立されました。しかしやがて、その体系処理でも残ってしまうホタルイ、ウリカワ、ミズガヤツリ、オモダカ、クログワイ等の多年生雑草の残草が全国的な問題となってきました。そのような折、昭和47年に西ドイツのBASF社（当時バーデッシュ社）から農薬登録のための試験にかけられたバサグラン剤が、これらの多年生雑草に高い除草効果を示したことで、一躍期待の星となりました。しかし、当初は湛水条件で処理する方法をとっていたため、試験を重ねる中で、極端な漏水田や水管理の難しい水田での除草効果の変動がしばしば報告されました。研究の結果、この効果変動はベンタゾンの水溶解度が大きいことに起因するものであることが判ったため、極力水の動きを少なくした‘落水処理’にてさらなる検討が続けられた結果、このような落水条件下でも多年生雑草に対し高い効果が認められることが証明され、安定した効果が得られるバサグラン剤の使用法が確立されるに至りました。

その後、バサグラン剤は単剤（液剤、粒剤）ばかりでなく、ノビエに対する効果を加えた混合剤（クリンチャーバスME液剤、ヒエクリーンバサグラン粒剤、ワイドパワー粒剤、トドメバスMF液剤）として活用の幅を広げてきました。また、近頃人気のドローン散布に対応した剤型（バサグラン・エアー１キロ粒剤）も上市されています。さらに畑場面でも、大豆栽培で問題となるアメリカセンダングサなどに対する特効薬として、‘大豆バサグラン液剤’の名前で人気を博しています。

このように長きにわたって広く農家の皆さんに愛されてきたバサグラン剤ですが、近年の経営面積拡大による水管理の粗放化や地球温暖化、外来雑草の侵入・定着などに伴って、問題雑草の残草リスクはますます高まってきており、いざという時に頼れる農家のパートナーとしての役割は、これまで以上に高まってきているのではないでしょうか。

今後のバサグラン剤のさらなる発展と活躍に引き続き期待しております。

（2025年3月）